

ージの出版年はいずれも MDCCXXXIV(一七三四)であるにもかかわらず、図版を含めて内容の一部が訂正されていることを演者は既に明らかにしている。しかし、訂正されたその真の年号は不詳である。Anatomische Tabellen(二七四五)では、訂正されるべき図版が訂正されておらず、東大所蔵の Ontleedkundige Tafelen(一七三四)と類似している。

一七三四年以後、Ontleedkundige Tafelenが Anatomische Tabellenと直接比較されたか、否かは定かではないが、*Ontleedkundige Tafelen* の図版の訂正が Anatomische Tabellen の訂正に基づくものであるのか、オランダにおいて独自に訂正されたものであるのかは明らかではないが、本書はこれらの点を考察するうえで重要な資料になると考へる。

(名古屋大学医学部解剖学第一講座)

## 日本におけるオランダ人による 四肢切断術

蒲原 宏

わが国において、四肢切断術・関節離断術が最初に行なわれたのが、何時、何処で、誰によってであるかについてはあまり明らかでない。

華岡青洲とその一門の人々によって内服全身麻酔剤を使用してこれらの手術が行なわれたことは周知の事実であるが、これらは何れも、文化二年(一八〇五)十月十三日の乳癌手術以後のことである。

華岡青洲・本間玄調・鎌田玄台らの施行した記録が今日残されているが、何れも華岡流の麻酔剤使用下の施術であった。

しかし全く華岡流外科とは無関係に、わが国で文化元年(一八〇四)長崎で四肢切断術が行なわれた資料がある。

これは文化元年秋にオランダ人外科医によってオランダ

人船員の前腕の切断手術が長崎出島で行なわれた記事資料である。

馬場貞由訳『瘍医新書手足切断篇』の序文にその事実が大槻玄幹によって次のように記されている。

「苛私的兒瘍医新書手足切断篇序

(前文略) 斯ニ一ツノ奇談アリ今年甲子ノ秋荷蘭ノ船長崎ニ入津ノ時、例ニ由テ石火矢ヲ放チケルニ、如何シタリケム、二度目ニハ藥ニ火付カサリケレバ、其人筒ノ中へ再回迄右ノ手ヲ差入レテ藥ヲ込シニ一人側ヨリ火口ヲ押シ、氣ノ漏レサルヤフニシケル。其人少シノ油断シケルニヤ、忽藥ニ火移リテ吹出シ、筒ノ中ニ入レタル將指ヨリ大指ヲカケテ腕ノ中ニ三寸程マテ立チ割レタル如クチギレテ殲粉ト為リテ空中ニ飛ビ散リ失セケリル、其手ノ創口ヲ其儘置クトキハ、焰硝ノ火毒惣身ニ廻リテ終ニ死ニ至事トナレバ、其船ニ乗居タリシ、エンケルト云ヘル瘍医、翌日其人ヲ出島へ上陸セシメ、リートマアイエル、レッツケト云ヘル二人医ヲシテ彼手ヲ持タシメ、エンケル病者ノ臂ヲトルケツトト云ヘル道具ニテシバリ刃物ニテ肉ヲ切り、前後ヨリ引張ラシメ、其内ノ二本並ヘル骨ノ間ノ肉ヲ切り終リ、鋸

ニテ骨ヲ截チ落シ、其断口ニ有ル処ノ動脈ヲ引き出シ、糸ニテ結び、臂ヲシメタル道具ヲ漸々ニ緩メ其断口へ置木棉ヲナシ、又其所ヨリ巻木綿ヲシテ脈ノ惣体ヲ覆ヒ、其上ヨリ焼酎ニテ仕立タル藥ヲツギ流セシニ、数日ナラズシテ創口癒テナリ。

カカル術アル事ハ我邦ノ人モ兼テヨリ聞ツル事ナレドモ、虚誕トノミ思ヒテ信ゼザリシガ、此度彼人ノ所療セシ術ノ熟練セルヲ見聞ク人、尚ゲニサル事ノ有ント感歎セザルハナシ。

我邦瘍医ノ術ハ彼ニ比スレバ素ヨリ拙キ事ナレバ、夥多ノ瘡疥、金創等ノ治療モ思フ儘ナラネバ、空ク人ノ命ヲ絶チ、或ハ生涯、廢人トナセルルモ多カリシ、此後ニモシヤカカル創ヲ蒙ル者アレバ、此術ヲ習ヒテ療治セバ、人民ヲ救フ事、固ヨリ多カルベシ。

故ニ今訳家馬場某君、カノ国瘍医ノ貴ベル処ノ苛私的兒シセルセイント云フ書中ニ載ル手足ヲ断ルノ法術ヲ国字ニ訳シテ、之ヲ余ニ示シテ序セン事ヲ求ム。

予其志ノ篤キニ感シ拙キ筆ヲ顧ミズ、此書翻訳ノ因テ起ル所ナレバエンケルカ治療セシ始末ヲ記シテ是ヲ叙スルモ

ノナリ

文化元年甲子冬十二月吉日

仙台医員 大槻茂楨玄幹識

これは『整骨・整形外科典籍大系十二巻』に集録された『瘍医新書手足切断篇』に漏れた部分であるが、川口志幹写本(宗田一氏蔵)、奥田万里『釣玄全書外科篇』(名古屋蓬左文庫蔵)にも収録されているものである。

この手術の状況を長崎の御用絵師石崎融思(一七六八—一八四六)が描き、『長崎古今集覧名勝図絵』に収載されている。

この画では右前腕切断術として描かれているが、この頃開板されたと思われる長崎版画「ヲランダ人外科療治之図」では左前腕切断術として描写されている。

切断術にさいしての麻酔についての記録はないが、止血帯による止血と同時に発現する末梢神経の圧迫麻痺による知覚鈍麻ないし麻痺作用を除痛に利用したのであるうか。

ハイステル外科書の四肢切断術の部の翻訳の誘因となつたオランダ船礼砲発射事故患者を長崎出島のオランダ商館内で船医エンケルが行なつた前腕切断術が日本における外

科医による最初の四肢切断術であろうか。

オランダ側の史料についての調査はまだ行なっていないが、馬場貞由十七歳、大槻玄幹十九歳の文化元年(二八〇四)秋のオランダ船祝砲事故は図らずも、西洋十八世紀の四肢切断術が、ハイステル外科書の翻訳によってわが国にもより正確に知られることとなつたのである。

今後、オランダ側の長崎出島オランダ商館日誌などの照合によつてこの事実の医史学的研究の解明を行ないたいと考える。

(県立ガンセンター新潟病院)